# にかほ研修旅行報告書




２０２６年３月

秋田大学大学院教育学研究科
教職実践専攻（教職大学院）

# 目　次

２０２５年度研修旅行目的・日程・参加者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
仁賀保高校ＨＰ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
仁賀保中学校ＨＰ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
院内小学校ＨＰ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
白瀬南極探検隊記念館ＨＰ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
フェライト子ども科学館ＨＰ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
にかほ市教育委員会ＨＰ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
仁賀保高校の学校の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
仁賀保高校の学校の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
仁賀保中学校の学校の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
仁賀保中学校学校説明・懇談等・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
院内小学校の授業について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
院内小学校の学校の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
白瀬南極探検隊記念館の参観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
白瀬南極探検隊記念館説明・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
フェライト子ども科学館参観を通して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
フェライト子ども科学館での説明・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
にかほ市教育委員会教育長講話・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
にかほ市教育委員会教育長講話・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
にかほ市教育委員会との懇談について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
にかほ市教育委員会懇談・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
にかほ市教育委員会との懇談・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
研修旅行感想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24




Children's Ferrite & Science Museum



## ２０２５年度研修旅行の目的

秋田県内各地では地域の特色を生かした教育が推進されており、大きな成果をあげ秋田の教育の基盤を形成している。本研修は県内各地の特色ある教育を牽引する教育長、校長から直接話を伺うことによって、その理念や方法について研修し、今後の各地の教育に一層資することを目的とするものである。

また、地域のふるさと教材を発見し、その活用方法等についてフィールドワークを通して、現職教員と教職大学院学生がともに研修することにより、現職教員から教員としての姿勢や教材活用の視点を学ぶことも重要な目的と位置づけている。

にかほ市は「夢あるまち 豊かなまち 元気なまち 住みたいまち」を教育の基本理念として掲げ、ふるさと教育に重点を置いて、①知・徳・体の調和のとれた子どもの育成、②多様な学習機会の提供、③伝統文化の保存・継承に注力して教育活動を推進している。このような特色ある教育を展開するにかほ市の学校及びにかほ市教育委員会を訪問しその理念や教育実践について研修する。

地域の強力な支援を得て教育活動を展開する仁賀保高校、生徒が主体的に活動する仁賀保中学校、ICT を活用した教育に積極的に取り組む院内小学校では、それぞれ授業を参観し、授業づくり研修を行うとともに地域の教育を牽引するにかほ市教育委員会教育長から「我が町の教育」について講話をお願いし、にかほ市の教育を学び今後の各地での教育の参考とする。各校と教育委員会では、それぞれ校長、教育長、教職員と学生、大学教員を交えた懇談会を開催し知見を広め、考えを深める。

また、にかほ市には世界に先駆けて未知の大陸である南極大陸に足跡を残した白瀬矗の記念館やTDK に代表される地場産業が核となって地域経済を豊かにしているという特色を持つ地域である。こうした地域の教材の活用方法についてもフィールドワークを通じて研修を行う。

## 研修旅行日程

９月２５日（木）

08:20～09:45 秋田大学発（大型バス） 仁賀保高校着

10:00～10:50 授業見学 情報メディア科３年「課題研究」、２年「情報システムのプログラム」

11:00～11:50 学校経営説明、懇談等

12:10～13:00 昼食＜にかほっと、ねむの丘＞

13:25～15:15 仁賀保中学校（５校時:授業参観、６校時：学校説明と懇談）

15:30～17:00 フィールドワーク 白瀬南極探検記念館 （説明・見学）

17:15 温泉保養センター「はまなす」着

９月２６日（金）

08:45 温泉保養センター「はまなす」発

09:20～11:15 院内小学校 （2 校時：授業参観、３校時：学校説明と懇談）

11:30～12:30 フィールドワーク フェライト子ども科学館 （説明・見学）

12:45～13:45 昼食＜にかほ陣屋＞

14:00～15:30 にかほ市教育委員会訪問 教育長講話、学校教育課長・関係職員との懇談

15:40～17:00 教育委員会発 秋田大学到着予定

# 参　加　者

学校マネジメントコース

現職院生１年次

黒澤　英美子
煙山　明美
斎藤　明
澁谷　礼子
菅　徹
冨樫　真雄
長沼　真人
萩原　亨
堀川　るり子

カリキュラム・授業開発コース

学卒院生１年次

大場　彩加
嘉藤　麻菜
草彅　魁
沼田　彩花
八田　佳子
林　佑果
深井　愛歌
目黒　寧

現職院生１年次

南　陽子



学卒院生２年次

近江　衿香
木元　拓斗
小林　亜莉亜
近藤　聖眞
佐藤　愛海
佐藤　理晶
渡部　温子

発達教育・特別支援教育コース

学卒院生１年次

安達　健登
佐藤　里香
相馬　慈
藤原　宙詩
丸岡　初香

学卒院生２年次

田口　陽介

付添教員

伊藤　景子
近江谷　正幸
加藤　勝則
佐藤　修司
柘植　敏朗
長門　里香
和田　渉

※にかほ市教育委員会、仁賀保高校・仁賀保中学校・院内小学校、白瀬南極探検隊記念館、フェライト子ども科学館の皆様に、深くお礼を申し上げます。

# 仁賀保高校ＨＰ

1.　学校概要

仁賀保高校は、にかほ市に位置する県立高等学校である。昭和 52（1977）年に全日制過程普通科の高等学校として設置され、今年で創立 49 年目である。平成 15（2003）年度からは、普通科に加えて、秋田県で唯一の情報学科である情報メディア科が新設され、情報活用能力の育成にも力を入れている。

2.　教育目標

本校は、校訓「自立・克己・友愛」の精神を根幹とし、生徒と教職員の信頼関係を深め、生徒一人ひとりを心豊かに育み、その個性と能力を伸ばす教育を目指している。また、「地域の課題に積極的に取り組む人材育成」を中期ビジョンに掲げており、地域貢献・地域連携を教育の柱として位置づけている。

3.　普通科（デジタル探究コース）

普通科では、生徒が将来進みたい進路や学びの興味・関心に応じて、自由に選択できるカリキュラムが用意されている。一学級あたりの人数が少ないため、生徒一人ひとりにきめ細やかな指導が行われている。令和４年度からは、デジタル技術を活用し、探究的な学習を推進するデジタル探究コースが新設され、普通科においても ICT に力を入れた授業を受けられるところが本学科の特徴である。

4.　情報メディア科

情報メディア科では、デザインの構成、ポスターや動画の制作、情報通信の安定・安全のためのネットワーク構築、アプリ制作や Web システムなど、情報技術に関する様々な専門的な分野を学ぶことができる。また、生徒一人につき一台 WindowsPC が貸し出されたり、高機能 PC や情報通信産業界と同等の実習機器が使用できたりするところが本学科の特徴である。

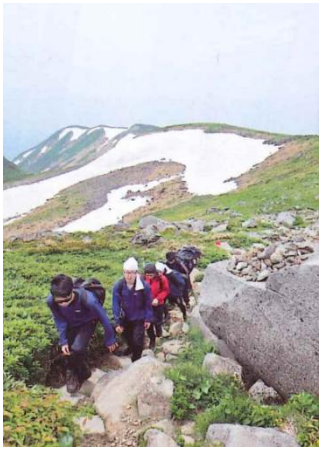


5.　特色ある取り組み

仁賀保高校は、にかほ市と連携協定を結んでおり、にかほ市からのサポートによって地域を探究する活動を行ったり、地域行事のポスター制作や小学生のプログラミング教室を開催したりするなど、地域に密着した取り組みに力を入れている。

また、令和７年度より、にかほ市の「仁賀保高校魅力化プロジェクト」の一環として、校内に「学習センター」が開設された。本施設は、生徒一人ひとりの学習習慣の定着と進路実現をサポートすることを目的としている。施設には、にかほ市の地域おこし協力隊の教育支援専門スタッフが常駐しており、平日の１９：３０まで利用することができる。



＜参考ＨＰ＞

秋田県立仁賀保高等学校　－　仁賀保高校ＷＥＢサイトへようこそ

**【近江　衿香】**

# 仁賀保中学校ＨＰ

１　仁賀保中学校について

仁賀保中学校は「新しい仁賀保町民づくり」の願いをこめて、昭和 34 年に平沢、院内、小出の３中学校を統合し創設された中学校である。学校は３地域のほぼ中央の丘に位置し、校舎屋上からは、南に鳥海山、西に日本海、北に近代科学工場群、東に仁賀保高原が眺望できる好環境に位置している。

仁賀保中学校の規模は生徒数 216 名、PTA 世帯数 191、学級数９（特別支援学級２）の適正規模であるが、生徒数は昨年度比で 28 名減少となっている。また、仁賀保中学校は学習、文化、スポーツにおいて輝かしい伝統をもつ中学校であり、進学率が高く部活動では各部とも、本荘由利地区内でも常に上位を占めている。 生徒は平沢小、院内小の２小学校から入学し、 保護者の学校に寄せる期待や関心は高く PTA 活動も盛んであるという特徴がある。

仁賀保地域は旧町民憲章の中の「太陽、緑、海の町」「心の通い合う町づくり」「健康、勤労、奉 仕を喜び合える生活」「世界に開かれた町づくり」「学問、芸術、体育における活動の重視」に基づき、これまでその基盤を築き上げてきた。しかし、平成 17 年 10 月の三町（仁賀保・金浦・象潟）合併に伴う「にかほ市」の誕生により、にかほ市の掲げる「夢あるまち 豊かなまち 元気なまち」の指針を受けて、教育の基本理念も「ふるさとに学び、ふるさとにかかわる教育の推進」のように「ふるさと」を教育の基点とすることに改めた。また、この精神を反映し、学校教育の目標も「夢をもち、心豊かで、元気な子どもの育成」と、今後の本市の子どもたちのあるべき姿を願うものとなっている。 一方で本地域の平沢、院内、小出の地域には著名な政治家や文化人の輩出があり、時代とともに変遷があったものの、帝石、昭石、TDK 等、石油化学の有力な企業の存在による豊かな経済力、雇用力はその恵まれた環境とあいまって地域住民に独特の意識の高さと活力を与え、旧町政の教育投資も大きく、地域住民の教育・文化に対する要求水準も極めて高い。また、にかほ地域は平成２年度にアメリカ、オクラホマ州ショウーニー市と姉妹都市提携を調印し、以後、毎年国際交流団が訪問するなど、国際交流事業にも力を入れている地域である。

２　学校経営理念と学校教育目標

仁賀保中学校の学校経営理念は「知・徳・体のバランスのとれた教育の充実を図り、夢や希望をもち、志を立てて学ぶ意欲の ある生徒の育成を目指す」「人の役、地域の役に立つことができる生徒の育成を目指す」「郷土を愛し、学校を愛し誇りにおもい、仲間を愛する心にあふれた生徒の育成を目指す」の３点である。

学校教育目標 は「ゆたかに たくましく」＜「温と厳」の指導をもとに、学力保障と成長保障＞であり、校訓は「～校歌の心 高らかに～ 自主・自律 協力 敬愛」である。そしてその校訓にあるように目指す生徒像として、「自主・自律　自らを鍛えて伸びる生徒」「協力　ともに励み合う生徒」「敬愛　はつらつと正しく強く行動する生徒」の３点がある。また、目指す学校像は、生徒にとって「学習内容がよくわかり、仲間と仲良く過ごせる魅力ある学校（通いたくなる学校）、教職員にとって「持ち味を十分発揮できる、やりがいのある学校」、保護者や地域にとって「自分たちの願いを受け止める信頼できる学校」と立場に応じて異なる目指す学校像が示されている。



【木元　拓斗】

# 院内小学校ＨＰ

１　学校の概要

にかほ市立院内小学校は、児童数が 92 人、学級数は７学級、教職員 23 名の学校である。（令和７年４月１日）

1874（明治７）年に地元の陽山寺を仮校舎に小国小の名称で創立された。1926（大正 15）年に現在地へと移転した。2024 年には創立 150 周年を迎えた伝統ある学校である。2028 年４月に平沢小学校との統合が計画されている。



院内小学校の校舎（秋田魁新報より）

２　学校教育目標

学校教育目標は、「夢に向かって学び、共に伸びゆく院内の子　～読む子　走る子　働く子～」である。

目指す学校像としては、「笑顔あふれる　力高まる　ぬくもりのある学校」を掲げている。

学校運営協議会では、「三地域のよさを生かした地域と共にある学校づくり」を掲げており、保護者や地域と学校とが連携しながら学校づくりが行われている。

３　院内油田と院内小学校（2024 年４月６日　秋田魁新報より）

かつて、仁賀保高原には、石油採掘のやぐらが無数に立ち並ぶ「院内油田」があり、昼も夜も多くの労働者が働いていた。高原の西側に位置する旧院内村に、古くから石油がにじみ出ることで知られる「臭津（くさつ）」と呼ばれる地区があり、米国の地質学者が調査し、有望な油層の存在を確認した。その後、複数の国内企業が採油に成功した。

1935（昭和 10）年には当時国内最多の年産 11 万３千キロリットルを記録し、国内有数の油田として知られるようになった。

院内小の６年生は 2020 年から毎年、院内油田跡地のフィールドワークを行っている。2023 年は児童 20 人が参加し、ポンピングパワーの遺構などを見学したほか、油田の歴史や採油方法などを学習した。



院内油田跡地（にかほ市観光協会ＨＰより）

＜参考＞

・院内小学校ＨＰ
https://www.fureai-cloud.jp/_view/nikaho-innai-e

・にかほ市ＨＰ
https://www.city.nikaho.akita.jp/gyosei/index.html

・にかほ市観光協会ＨＰ
https://nikaho-kanko.jp/innaiyudenatochi/

・秋田魁新報 2024 年４月６日
＜学校と地域 150 年のものがたり＞（５）［院内小（にかほ市）］今も残る繁栄の証し
https://www.sakigake.jp/news/article/20240406AK0020/

**【近藤　聖眞】**

# 白瀬南極探検隊記念館 HP より

１　施設の概要

秋田県にかほ市に位置する白瀬南極探検隊記念館は、にかほ市金浦出身の探検家・白瀬矗（しらせのぶ）陸軍中尉と、日本の南極探検・観測の歩みを後世に伝える「探検と極地の博物館」である。1990年４月に開館され、以来、白瀬やその探検隊らの苦難と営みを紹介するとともに、近代以降の南極観測史や地球環境への視点を含んだ展示・体験型の学びを提供している。

２　建築と構造

この記念館は、世界的建築家黒川紀章氏の設計による、南極大陸や氷山を想起させる造形を意図した外観が特徴である。展示館はドーナツ状に構成され、その中心には円錐型の「オーロラドーム」が据えられている。オーロラドームでは、オーロラの実写映像や地球・南極の成り立ちを描いたCG映像などを上映する空間となっており、来館者に視覚的インパクトを与えつつ、極地世界への没入感を高めている。近年では、このオーロラドームの映像を全面的にリニューアルし、国立極地研究所の協力を得て「南極の自然といきもの」「オーロラのふしぎ」という新コンテンツを導入した。



３　展示構成・テーマゾーン

記念館の展示は、以下のようなテーマゾーンに分かれて構成されている。

①プロローグ

白瀬矗の幼年期から探検の志を育んだ歩みを紹介。

②白瀬矗と南極探検隊

白瀬矗率いる南極探検隊の歴史、探検計画、隊員の記録や関係資料を展示。

③白瀬の夢を継ぐ

探検精神を受け継ぐ現在の南極観測や科学調査を紹介。

④雪上車展示

白瀬隊や日本の南極観測隊が実際に使用した雪上車を展示。特に、KD605型雪上車が目玉として展示されており、第９次日本南極地域観測隊の南極点到達時に使われた車両として知られている。

⑤オーロラドーム

オーロラの実写映像と地球・南極の成立過程を示すCG映像を上映。

これらのゾーンを通じて、来館者は白瀬矗の人生、明治末期～昭和期にかけて行われた探検事業、国際的な南極観測の歴史、そして現代科学の視点から見た南極まで、時間・空間をまたぐ「極地の物語」に触れることができる。

体験型展示も工夫されており、雪上車に乗り込む体験や南極の氷に触れる展示など、来館者が五感を使って学べる要素も含まれている。

また、館内では南極昭和基地のライブ映像が視聴でき、現在の観測基地と極地環境とを「リアルタイムでつなぐ」試みもある。



**【小林　亜莉亜】**

# フェライト子ども科学館 HP

1.　フェライト子ども科学館について

フェライト子ども科学館では、TDK の初代社長である斎藤憲三と二代目社長である山崎貞一メモリアルホールをはじめ、科学の世界に入り込める展示室や未就学児も楽しめるゆうぎしつなど大人から子どもまで楽しめる施設である。楽しく遊びながら学ぶことができるため、観光施設としてだけでなく教育施設としても大きな役割を果たしている。

2.　フェライトについて

「フェライト」(Ferrite) は、酸化鉄を主成分にコバルトやニッケル、マンガンなどを混合焼結した磁性体（電子素材）である。粉末の原料を 1,000～1,400℃の高温で焼き固めて製造されるため、セラミックの仲間にも加えられる。材料の成分や配合具合によって多くの種類があり、粉を押し固めて作るためいろいろな形にできる。フェライトには２種類あり、一度強い磁界が加わると永久磁石になる「ハードフェライト」と、磁界（磁石）に触れると磁石になり、磁界を取り去るともとに戻る「ソフトフェライト」がある。

3.　フェライトの生みの親・育ての親について



【斎藤憲三 氏】

昭和初期の秋田に産業を興すため尽力した、初代 TDK 社長。さまざまなことを試み、夢を信じ、挫折しながらも、故郷の可能性を信じていた。そして、生涯に２つの事業を成し遂げ、歴史に自らの名前をきざみ込んだ人物である。1 つは「フェライト生産の工業化」、もうひとつは「国会議員として科学技術庁の初代政務次官になったこと」。齋藤氏を動かしたのは故郷への愛だったそうだ。



【山崎貞一 氏】

TDK の二代目の社長となる山崎貞一氏は、東京工業大学に在学中、フェライトを発明した加藤与五郎博士と武井武教授(当時)と出会う。その後、東京電気化学工業株式会社（現在の TDK）に入社し、フェライトの工業化に力を注いだ。秋田県名誉県民にもなっている偉大な人物である。



【加藤与五郎 氏】

東京高等工業学校電気化学科の教授に任命されてから、コロイド科学研究で理学博士の学位を受けた。その後、東京高等工業学校、東京工業大学へと昇格。ここで 15 年以上にわたって研究を進め、約 300 の発明特許を得た。その中には、武井 武博士とともに研究を進めたフェライトも存在した。フェライトの発明は全世界に大きな影響を与えたそうだ。



【武井 武 博士】

昭和７年、理学博士の学位を受け、東京工業大学教授、慶応義塾大学教授等を歴任。フェライトの発明や開発・応用電気化学の分野において卓越した功績をあげ、学術の進歩および産業の発展に貢献された人物である。

[参考 HP]

フェライト子ども科学館 HP

**【佐藤愛海】**

# にかほ市教育委員会 HP

１　基本情報

にかほ市教育委員会（以下，市教委）は，にかほ市の公式ウェブサイト「子育て・教育 → 教育委員会」のページに掲載されている。市教委は，教育総務課・学校教育課・生涯学習課・文化財保護課の４つの部門から構成されており，それぞれに班が設置されている。

所在地は 〒018-0311　秋田県にかほ市金浦字南金浦 49-2 で，連絡先として教育総務課「TEL 0184-38-2259, FAX 0184-38-2252」となっている。

開庁時間・閉庁日について，明確な記載は教育委員会の専用ページでは確認できないが，にかほ市役所全体の役所窓口案内において平日対応を基本としている情報がある。

教育長は小園敦氏が務めており，令和５年 12 月 10 日就任し，任期は令和８年 12 月９日までだ。




２　閲覧可能な資料

市教委のホームページでは、「会議録」・「教育長の交際費」・「教育要覧『にかほ市の教育』」・「にかほ市総合教育会議・教育大綱」・「学校環境適正化検討委員会」・「にかほ市学校環境適正化基本計画」・令和７年度使用中学校教科用図書採択結果などが公開されている。

市教委は、これらの資料を通じて、市の教育行政の透明性を高めるとともに、市民への説明責任を果たすと位置づけられており、「学校環境の適正化」など、教育施設・学習環境に関する中長期的な計画策定にも取り組んでいる。

また、子育て・教育に資する施設・施策として、「放課後の居場所確保支援」など市内の学童保育・放課後支援環境に関する情報も、移住・Uターン支援の観点から市公式サイト内で紹介されている。

加えて、市教委が支援する教育行事として、令和７年８月２４日に「にかほ市教育魅力化シンポジウム」が開催され、にかほ市教育委員会が推進する「秋田県立仁賀保高等学校魅力化プロジェクト」の一環、かつ市制施行 20 周年記念事業の位置付けで実施された。会場は仁賀保勤労青少年ホームで、講演・パネルディスカッションを通じて「教育の魅力化による地域の活性化と新しい地域課題解決のかたち」をテーマに議論が交わされた。講演では岡田武史氏が「今治からの挑戦」と題して講演を行い、パネルディスカッションでは市長・高校校長・卒業生らを交えて少子化時代の教育・地域のあり方について意見が交わされた。会場には多くの市民が参加し、地域の教育とまちづくりを結びつけた実践的な議論の場となった。

このように、市教委は、教科用図書の採択や学校環境適正化、放課後支援、地域教育魅力化といった複数の分野にわたる情報をホームページで公開し、住民・保護者・地域に対して情報提供を行っている。

**【佐藤　理晶】**

# 仁賀保高校の学校の様子

１　生徒の様子

仁賀保高校の生徒は、難易度の高い課題にも一生懸命に取り組む真剣な眼差しが印象的であった。情報メディア科の３年生と２年生の授業を拝見したが、動画編集の課題研究を行っていた３年生は、大学院の教員や院生が部屋に入っても一瞬こちらに目線を向けてくれる程度で、集中を切らすことなく、教員の指示を聞いていた。一通り指示を聞いた後は、個人で黙々と作業に取りかかっていた。分からないところをペアで確認する様子も見られたが、基本的に自力で解決できていたため驚いた。２年生の情報システムのプログラムの授業では、信号機のシステムのプログラミングを行っていた。早めに課題をこなす生徒もいれば、苦戦する生徒もいて、進み具合はまちまちであったが、その都度教員が的確な助言をしていたり、生徒同士で教え合ったりして、全員が課題を進められるように工夫されていた。生徒同士で教え合うときの話し方も上手であった。答えをいうのではなく、「どこを間違ってその結果になったのか」「どうすればいいのか」といったことに苦戦している生徒自身が気づくことができるような話し方をしていた点も非常に印象に残っている。専門性の高い内容を学べば学ぶほど、こうした機会が多くなり、生徒同士の絆が深まっていくのではないかと思った。

２　校舎の様子

仁賀保高校は、昭和 51 年に秋田県議会にて設置を議決され、翌年の 11 月に仮校舎から現在の場所に移転されている。学校の図書館には、にかほ市が主体となって運営する学習センターが開設され、その道に詳しい職員が、大学受験から就職試験まで様々な進路に関する相談に個別で対応している。

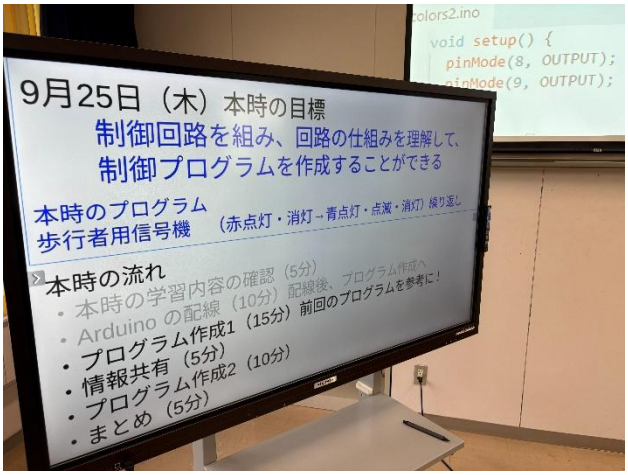
３　学習環境と教職員の様子

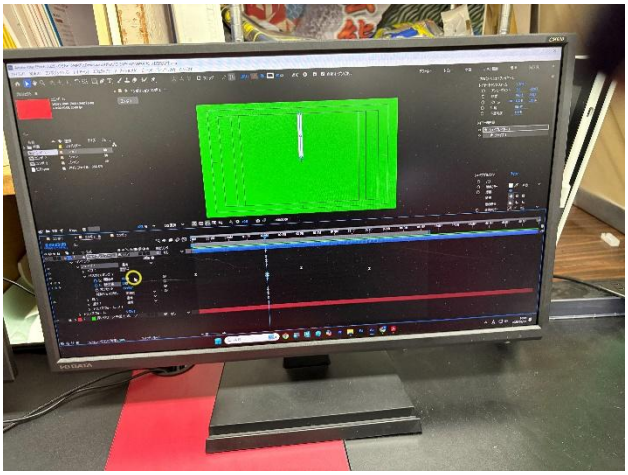
情報メディア科の新設に伴い、ＩＣＴ機器の充実が図られたことがうかがえた。情報メディア科の３年生が使用していた教室では、生徒２人１台の作業用ＰＣのほかに、教員が共有する資料を閲覧するためのＰＣが２人に１台使用できるようになっていた。机や椅子も作業に集中するために使い心地のよいものにされていることを感じた。

教職員の指導の様子からは、専門性の高さと生徒との信頼関係がうかがえた。一人一人を見て、困っている生徒には助言しつつも、生徒の「自分でやりたい！」という気持ちを尊重している温かい指導が印象的であった。

情報メディア科や学習センター、充実した設備はもちろんのこと、学校にかかわる方々の細やかな支援により、生徒がやりたいことや進みたい道を叶えることができるような環境が整っている、魅力的な学校であることを感じた。

**【渡部　温子】**



# 仁賀保高校の学校の様子

１　情報メディア科　３年生「課題研究」

まず、始めに情報メディア科３年生の「課題研究」について、見学を行った。今回の課題研究では、After　Effects というアプリを用いて、図形を使ったアニメーション作成の活動を行っていた。担当の先生は、図形の拡大率の変化や、開始点、終了点の変化など、時間経過で目的の動きをさせるためにはどこを変えればいいのかを生徒に伝えており、生徒は皆真剣に話を聞きながら、アニメーション作成にとりかかっていた。印象的であったのが、生徒の授業に対する態度であった。パソコンで作業を行う際の表情や顔つきがとても熱心で、生徒達にとって、この授業が本当に自分のやりたいことだ、夢中になって取り組めるものだというのが分かるような授業態度であった。これまでの授業の積み重ねがきちんとできているからか、生徒達は、アプリを扱うことに慣れていて、何をするべきか分からないと感じているような姿はほとんど見られなかった。

２　情報メディア科　２年生「情報システム」

３年生の「課題研究」のあとは、２年生の情報システムの授業を見学した。この授業では、歩行者用信号機を模した機器の制御プログラム作成を行っていた。授業は、与えられた課題について、まず、生徒に自力で取り組ませて、次に、課題が出来た生徒が、出来ていない生徒に教える、それでも解決しないときに、最後に教員がヒントを与えるという方式で進めていた。また、この授業では、ChatGPT を導入しており、制御プログラム内のエラーが発生した箇所の判別や、早く課題を終わらせた生徒に対する追加課題の作成など、多くの場面で活用が見られた。ChatGPT を効果的に活用できるようになると、授業の選択肢を大きく広げることができると気づかされた授業であった。



３学校経営説明・質疑応答

最後に、学校経営について、木村校長先生にご説明いただいた。仁賀保についての知識問題も交えながら、仁賀保高校ではどのような経営をしているかを知ることができた。仁賀保高校の特色として、やはり情報メディア科や、学習センター、カリキュラムの多様さから生徒一人一人に寄り添った学習支援をしていること、地域とのつながりを活かした授業、地域連携の重視があり、とても印象的な学校経営をしていると感じた。

**【田口陽介】**



# 仁賀保中学校の学校の様子

１　学校の様子

窓が広く、日の光が入る校舎であり、外を見れば雄大な鳥海山を一望することができた。広い廊下に、扉の開かれた教室は開放的な雰囲気を感じさせた。のびのびとした学習環境であり、そこで学べる生徒らを羨ましく思った。



２　生徒の様子

私たちは二手に分かれ、１年生から順に授業の様子を見させていただいた。その中では、真剣に数学の問題を解決しようと取り組む姿、全体で自分の意見を伝えようとする姿、グループで他のグループに負けまいと一生懸命取り組む姿など、思い思いに授業に参加する姿が見られた。どの授業を参観しても、生徒らは授業に積極的に取り組んでおり、そのような姿を実現させる先生方に尊敬の念を抱いた。

３　授業の様子

授業を参観させていただく中で特に印象に残った点が２点あった。

１つ目はＩＣＴ機器のの活用である。例えば１年生の国語の授業では、コラボノートに各自の意見を共有した後、プロジェクターを用いて意見を共有していた。このことにより、多様な意見に触れるとともに、自分と近い意見、違う意見に生徒自らが気づけるようになっていた。また、３年生の英語科の授業ではプロジェクターを用いて英語を使ったクイズを行っていた。このことにより、英語の表現に親しむとともに、意欲的に授業内容に取り組めるようになっていた。

２つめは生徒の発見を促す授業づくりである。特に３年生の国語の授業では、ゲームを通して国語の造語力を理解し、語彙を増やしていた。活動の中で生徒自らが気づく場面も多く、実感を伴った理解がなされていた。また、２年生の理科ではビーカーに入れた枝葉をもとに蒸散の様子を調べようとしていた。この観察では、生徒の気付きをもとに、ビーカーの水の減少具合や対象実験との比較により、植物の気孔の働きまで考察を広げることができるのであろう。

これらの印象に残った点は一朝一夕でできることではない。授業をされる先生方が日々生徒のことを考え、実態に合わせた指導を試し、改善しながらつくられているものであろう。だからこそ、各クラス・教科で異なった工夫がなされていた。私たちもこれからインターンシップや日々の授業実践を行い、よりよい授業を目指していく。その中で今回の訪問で感じた姿勢を大切し、授業研究、実践、改善を行っていきたい。



**【大場　彩加】**

## 仁賀保中学校経営説明・懇談等

1．学校の様子

にかほ市立仁賀保中学校は、昭和 34 年に平沢、院内、小出の 3 中学校を統合し創設された。平成 22 年には、釜ヶ台中学校と統合し、令和元年に創立 60 周年を迎えた。校舎は、鳥海山や日本海、仁賀保高原などが眺望できる丘の上に位置し、教室からも豊かな自然が一望できた。また、校舎自体も築 15 年ながら、広い廊下や中庭、バルコニーなどがあり、近未来的な造りであった。さらに、全校が集まって給食を食べるランチルームも設置されており、生徒たちがのびのびと学べる環境が整えられている印象であった。

2．学校経営について

校訓である「自主・自律、協力、敬愛」をさらに「セルフコントロール力、コミュニケーション力、ホスピタリティ」として具体化することで、
知・徳・体のバランスのとれた教育の充実を目指していた。3 学期を 5 期に分け、スモールステップで目標を立て、教師集団として共通理解を図っていた。また、学期ごとに生徒会が集会をし、学期の目標を共有し、その後、学級の目標を立てるなど、教員と生徒で目標を共有しながら学校生活を送っていた。生徒にとっては、自分たちの成長のために日々学校生活を送り、学んでいることが意識化され、学校全体として支えてくれているという安心感にも繋がると考えた。さらに教職員にとっても、生徒のために何ができるか、何に力をいればよいかがわかりやすく、目指す教職員像としても挙げられている「持ち味を十分発揮できる、やりがいのある学校」にも繋がる取り組みであると考えた。校長先生や研究主任の先生からのお話を聞き、学級経営は、一部の管理職が行うものではなく、教職員や生徒たちも含め、学校全体で創り上げていくものであるということを学ぶことができた。



3．外部との連携について

仁賀保中学校では、豊富な地域資源や地域人材を活用した教育活動に力を入れていた。ゲストティーチャーとして卒業生を招き講話を行ったり、にかほ市若者 100 人会議に参加しディベートを行ったり、地域と連携した特色ある教育活動をしていた。また、SC による自己効力感を高めるための講話や姉妹都市であるショウーニー市との交流など、外部と連携した教育活動も行っていた。これらの特色ある教育活動をより効果的な学びに繋げていくために、学校全体としてカリキュラム・マネジメントを大切にしていた。研究主任の先生は、「やって終わりではなく、キャリア教育や特別活動として、『何度も味わい直す』ことができるようにしたい。」とお話していた。今年度は、授業や行事など、様々な学びを繋ぐことができるように、記録を残し、来年度以降のカリキュラム・マネジメントに活かす取り組みを行っていた。地域資源を活かした特別活動や教材を工夫した授業など、それぞれが生徒にとってより意義のあるものにしていくことも必要であるが、カリキュラム・マネジメントによって、それぞれの学びを繋ぐことで、より効果的な教育活動を創り上げていくことも重要な視点であると考えた。

**【嘉藤麻菜】**

# にかほ市立院内小学校の授業について

１　児童の学びの姿勢について

児童は落ち着いた態度で、集中して授業に取り組む様子が見られた。終始和やかな雰囲気で、他者の発言や発表にも肯定的な態度を示していた。また、学習の内容に興味を持ち、主体的に解決しようとする様子が見受けられた。自分の考えを明確に持ち、それをプリントにまとめたり、他者に伝えたりと、言語化を通して理解を定着させていた。人数が少ないこともあり、活発に意見が飛び交うことはあまりなかったが、少人数やペアでの話し合いの際には、積極的に意見交換する様子が見られた。素直で思いやりがあり、楽しそうに学んでいる様子が印象的であった。

２授業の構成と展開の工夫

6 年生の算数の授業では、データの活用の学習を行っていた。ラーメン屋を紹介するために、複数のレビューを見てデータを整理するという内容であった。導入部分で、教師が「にかほ市で紹介したいラーメン屋は？」と児童に聞いていたことで、ラーメン屋の名前がたくさん上がり、学習への興味を引き出すことができていた。また、平均値や最頻値、中央値などの求め方を冒頭で確認していたことで、学習への取り掛かりがスムーズになっていたと感じた。

4 年生の理科の授業では、水の変化の学習を行っていた。雨が降った後の運動場の演壇を観察し、時間が経つと水がなくなるのはなぜなのかを考えさせていた。空気中に出て行った、金属にしみ込んだ、消えたなどといった様々な意見が上がったが、教師はその意見の理由や根拠も述べさせ、言語化する力を大切にしている様子がうかがえた。また、教室にある加湿器の水やドライヤーなど、身近な物を例に挙げて、水の蒸発をイメージさせている点が印象に残った。中学生の目線に立って物事をとらえてみることが必要だと再確認させられた。さらに、まとめの文章を自分の言葉で書かせていた。演壇の上の水はどこへ行ったのかを、教師の説明や友達の発表などを参考にして自分の考えをまとめていて、学習内容をアウトプットすることにつながっていたと感じた。



３　学習環境と教職員の様子

前の黒板だけでなく、後ろの黒板や電子黒板なども使用し、教室全体を使って授業をしていた。また、前の黒板の課題の横にまとめが書かれていて、授業における課題とまとめが一目でわかるような構造的な板書になっていた。

教室には、社会コーナー、国語コーナー、道徳コーナーなどといった教科に関連するニュースやトピックを掲示していた。身近な話題を取り上げることで興味関心が高まりやすくなるほか、教科を社会の出来事と結び付けて考える力が身に付くのではないかと考える。このように教室全体が学びの場となるような仕掛けをつくることで、クラス全体で学びの意欲を高めていくことにつながる。

教職員は、生徒に対して温かい雰囲気で接したり、生徒の思いや発言を大切にしたりする様子が見られた。さらに、生徒が思考する時間を十分に確保していた点も印象的であった。生徒が安心感をもって学校生活を送るためには、教職員と生徒の信頼関係の構築が何よりも大切であることを実感させられた。　　**【八田佳子】**

## 院内小学校の学校の様子

１　子どもたちの様子

院内小学校の児童たちは、授業が始まる前の休み時間に、元気よく挨拶をしてくれたり、学校に到着した際や出発する際に、きらきらとした笑顔を見せながら、こちらの様子をうかがっていたりしており、子どもらしい活発でいきいきとした印象を受けた。

授業が終わって休み時間に入ると、朝ドラのあまちゃんのオープニングテーマが学校中に響き渡り、児童たちは秋に行われるマラソン大会の練習をするため、グラウンドの回りを何周も走りながら練習を始めた。つい先程まで算数の授業の振り返りを真剣に書いていた児童たちであったが、何分もしないうちにグラウンドに移動し、楽しそうに声を出しながら走り抜けていった。

２　教室の様子

院内小学校の４年生のクラスと６年生のクラスの授業を観察しに行かせていただいたが、黒板の上には、「感動」という文字と、「凡事徹底」「流汗大道」という言葉が飾られていた。これらの言葉は、普段の当たり前のことをしっかりとやり抜くことは大切にしながらも、努力を積み重ねて大きな目標を達成するという熱いメッセージのように感じた。

また、どちらの教室でも、１人１台のタブレッドと教師が操作できるスクリーンが用意されており、児童たちがタブレッドに打ち込んだ内容をリアルタイムで、全体のスクリーン共有し、クラス全体の意見が反映されていた。４年生の授業では、色付きの付箋を活用し、色によって意見を分ける工夫がされていたため、クラス全体でどの色の意見、どの色の付箋が多くなっているのか一目瞭然であり、クラスの中が非常に盛り上がっていた。このような、１人１人にとって分かりやすい授業を行える環境が整備されており、児童たちは安心して学びに取り組めるだろうと感じた。

３．つながりを大切にした授業、活動

院内小学校の学校経営における研究主題は、「つながりのよさを見いだし、学ぶ楽しさを実感する子どもの育成」である。自分の日常や学校の行事と関連付けた内容にしたり、これまでに学んだ力を使ったりすることで、児童は学びを自分事として捉えることができ、必要感を感じることにつながる。６年生の授業では「大学院の先生方をラーメン屋さんに連れていく」という学習課題が設定され、ラーメン屋さんの口コミのデータの整理をする内容であったが、この内容は教科書には載っておらず、学びの必要感を持たせるための担任の先生オリジナルのものであった。

授業内だけではなく、院内小学校の特色ある学校・地域の活動として、「アスパラガス収穫体験」、「全校縦割り院内ウォッチング」、「ジオパーク」など、学年間や地域との関わりを大切にした活動が数多く行われている。

児童たちが授業内外において「つながり」を感じることができる工夫がちりばめられている印象を受けた。



【林　佑果】

# 白瀬南極探検隊記念館の参観

１　白瀬南極探検隊記念館の様子

白瀬南極探検隊記念館の建物の外見は特殊な造形・構造をしている。円錐形の建物（オーロラドーム）が中心にありその周りを囲むようにドーナツ状の建物が建っている。職員の方の説明によると、この建物は建築家の黒川紀章の設計であり、中心の円錐が名曲の氷山を周囲の建物が白瀬南極探検隊のチームワークを表しているということだった。

最初に案内されたオーロラドームでは、白瀬矗の生涯や白瀬南極探検隊の活動、南極で見られるオーロラの投影を見ることができた。その後、職員の方が南極に落ちたという隕石と南極の氷が水に溶ける様子を見せていただいた。隕石は主成分が鉄ということで、磁石が引き寄せられることを体験した。氷は普通の氷に比べ含有される空気量が多いらしく、パチパチと音を立てて溶けていた。




２　展示室

南極探検隊の資料などが展示されている区画では、白瀬矗をはじめとする探検隊員の手記や私物が数多く展示され当時の様子やどのような思いで南極探検に臨んでいたのかが伝わってきた。各展示物には説明書きとイラストや図も添えられており、予備知識があまりない人でも彼らの学術調査について知ることができるようになっていた。特に白瀬矗の生涯を展示している部分では、いかにして白瀬が秋田から南極へとたどり着くに至ったかを知ることができた。職員の方から説明をいただいたが、白瀬は南極に行くために、禁酒や禁煙だけでなく、秋田の冬においても暖をとらないことを自分に課していたとのことだった。秋田よりも厳しい南極の寒さに耐えることを青年のころから心がけていたことが分かった。




展示室には他にも実際に乗ることができる海南丸原寸大オブジェや南極観測隊の雪上車が飾られていた。雪上車は黒鉄の装甲で覆われており大迫力であった。こちらも実際に乗り込むことができ、古めかしい内装だが、思いのほか運転席の座り心地は快適で、走行中の音などを再生することもできて、同じ目線で南極の氷の大地の上でこの車を走らせた人がいるのだということに思いを馳せることができた。

また、精密な船の模型がいくつも飾られており、大勢の人々を乗せて海の上を渡るという船の目的によって生み出された機能美を味わうことができるものだった。この他にも、南極に生息するペンギンや鳥の剥製や採掘された鉱物を顕微鏡で見ることができる場所もあり、豊富な歴史的資料や貴重な体験を得られる素晴らしい施設であると実感できる見学となった。

**【草嶺　魁】**

# 白瀬南極探検隊記念館説明

１　白瀬南極探検隊記念館とは

白瀬南極探検隊記念館は、平成２年に作られ、令和７年に開館 35 周年を迎えた。現在のにかほ市金浦出身の白瀬矗が、日本人で初めて南極探検に挑んだ業績を記念するため、開館した。白瀬矗の壮大な夢とロマンに共感した 30 人の男たちが、明治の末期南極の白い大陸に繰り広げた壮絶な人間ドラマを今に伝えている。また、白瀬らのスピリッツを継承し現在も続けられている、日本の南極観測隊の歴史と現在についても知ることができる。

建築家の黒川紀章さんによって設計された施設は、氷山を暗示した円錐型の「オーロラドーム」を中心に、打ちっぱなしコンクリートで作られた展示室がドーナツ状に取り囲む構成となっている。できる限り遠くからもランドマークとして見えるようにしたいという思いが込められている。純粋な幾何学上の形態は、氷山を表現するだけではなく、白瀬南極探検隊の厳しく、又崇高な偉業を示しており、ドーナツ型の形態は探検隊全員のチームワークを表現しているという。



２　常設展示の紹介

館内に常設されている展示について紹介する。まず、白瀬矗の南極探検ゾーンである。このゾーンでは、白瀬矗をはじめ、南極探検を夢見て運命を共にした隊員たちの足跡を振り返る。「開南丸」内部の復元や帆船模型を展示している。『白瀬の夢を継ぐ』ゾーンでは、白瀬の夢を継いで始められた日本の南極観測の歴史、そして、現在の南極観測の状況やふしぎ大陸のエピソードを映像を交えて紹介している。そのほか、情報コーナーでクイズにチャレンジができたり、４次元地球儀を使って南極の位置や気候を立体的に観察することができたりする。オーロラドームでは、南極と北極で撮影された美しいオーロラ映像を正解で初めて同時上映している。南極の自然や生物の様子なども上映している。

３　ふるさと教育とのかかわり

にかほ市の小中学校では、校外学習で訪れるなど、ふるさと教育の教材としても活用されている。子どもたちは、展示を通して白瀬矗の生き方や挑戦する姿勢に触れ、自分たちのふるさとに誇りをもつとともに、将来の夢や目標について考えるきっかけを得ている。

また、館内では、様々な資料が展示されているが、収まりきらない資料は収蔵庫に保管されている。これらの資料は、学校現場で授業や調べ活動に活用してもらうようにと昨年デジタル化された。今後も、地域の教育現場と連携しながら、白瀬矗の偉業が次世代に伝えられていくことが期待できる。

**【沼田　彩花】**

# フェライト子ども科学館参観を通して

１　フェライト子ども科学館について

TDK が有する磁性技術「フェライト」に関するフェライト子ども科学館は、磁性の不思議や応用を楽しく学べる施設である。館内には磁石の性質や仕組みを分かりやすく紹介する展示が並び、実際に磁石を作るワークショップも行われているため、体験を通してフェライトの魅力を身近に感じることができる。子ども科学館として設計されているが、展示内容は専門的な要素も含まれており、大人でも十分に楽しめる内容となっている。科学の原理をわかりやすく伝える工夫が随所に見られ、磁性というテーマを通して「技術の奥深さ」を感じられる貴重な学びの場であると感じた。



２　展示の様子

展示では、フェライトから作られた磁石の強さを比較するコーナーや、磁石を近づけることで音が鳴るスピーカー、フェライトに関する詳しい解説などがあり、磁性の多様な側面を体験的に学ぶことができた。単に N 極と S 極が引き合う・反発するという原理だけでなく、フェライトが私たちの身近な製品にも幅広く活用されていることを実感できた点が印象的であった。また、磁石に関する展示以外にも、熱気球の原理を学べる装置や音の振動でバネが動く仕組みを体験できる展示などがあり、科学の面白さや奥深さを感じることができた。子どもから大人まで楽しみながら学べる魅力的な科学館だと感じた。

３　ワークショップの様子

フェライトから磁石を作るワークショップでは、まず磁石ができる仕組みについて学んだ後、実際に自分の手で作成する体験を行った。フェライトはもともと N 極・S 極の向きが定まっていない状態の物質であり、強い磁場の中に入れることで極の方向が整い、磁石としての性質を持つようになるという。体験前はフェライト同士を近づけても反応がなかったが、磁場処理を経て磁石化すると、身近に使われている磁石と同じようにくっつくようになり、その変化に驚いた。文章だけでは理解しづらい原理も、実際の体験を通して理解が深まり、フェライトがどのように磁石へと変化するのかを実感をもって学ぶことができた。



【深井　愛歌】

# フェライト子ども科学館での説明

## １　フェライト子ども科学館について

フェライト子ども科学館では、施設やフェライトについての説明とフェライトを磁石にする体験をさせていただいた。

フェライト子ども科学館は、秋田県にかほ市平沢に生まれた齋藤憲三氏の生誕 100 年を記念して建設された。齋藤氏の科学に対する情熱や、チャレンジ精神を未来に受け継ぐとともに、体験を通して楽しみながら科学する心を育てる施設となっている。展示室では、様々な科学に関する体験ができ、齋藤憲三・山﨑貞一メモリアルホールも設置されている。



## ２　フェライトとは

フェライトとは、酸化鉄(赤さび)に、さまざまな金属などを混ぜて 1000～1400℃の高温で、陶磁器(お皿や茶碗等)のように成形して焼き固めて作られる。

フェライトには、ハードフェライトとソフトフェライトがあり、ハードフェライトは永久磁石になり得るものである。バリウムやストロンチウムを混ぜるとハードフェライトとなり、マンガンやニッケル、亜鉛や銅などを混ぜるとソフトフェライトとなる。

作られたばかりのフェライトや鉄は磁束線の向きが揃っておらず、磁石の力が働かないが、磁石にくっつくと磁石の力を持つ。離すと元に戻るが、ハードフェライトを強い磁界の中に入れると、磁石の力を持ち、磁石から離しても、磁石の力は失わず、永久磁石となる。

## ３　フェライトの特徴

フェライトの特徴として、以下のようなことが挙げられる。

◯優れたところ

・主原料が酸化鉄(鉄さび)であるため、安価に生産できる。
・混ぜる金属や比率によって、特徴が変化するため、機器の特徴にあわせたフェライトを作ることができる。
・錆びにくい。
・磁力は伝えるが、電気は通さない。(例外有り)
・耐久性がある。
・電波を吸収する。

◯弱点

・割れやすい。
・ネオジム磁石などと比べ、磁力が弱い。

## ４　フェライトを磁石にする体験

実際に、フェライトを磁石にする体験をさせていただいた。最初は鉄にくっつかない状態であったフェライトを強い磁界の中に入れると、吸い込まれるように入っていった。取り出すと、既に磁石となっており、一瞬で磁石へと変化することに驚きを感じたとともに、貴重な体験ができた。

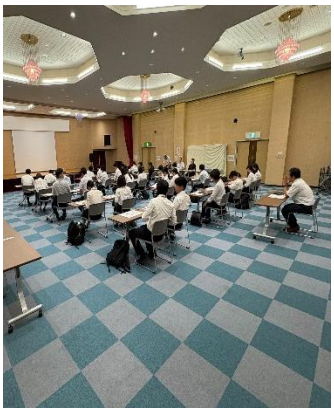


**【目黒　寧】**

# にかほ市教育委員会教育長講話

１.教師としての心構え

小園教育長が呼ばれた瞬間、私たちは心をグッと掴まれた。「2 日間研修されてきて、皆さん疲れていますよね。では、その疲れているという言葉の前に“とり”を付けてみましょう。そうです。皆さんはとりつかれているだけですよ。」その言葉を聞いた瞬間、会場が和やかな雰囲気に包まれ、その場の全員が、小園教育長の人柄に引き込まれた。小園教育長の話術や間の取り方は、とても心地よく、こうした話術は、話す仕事である“教師”には必要不可欠なものであると言えるだろう。小園教育長は教師にとって必要なことがあるといった。それは、「常に学び続ける姿勢が大事」ということである。新聞やニュースに目を配らせ、話のエビデンスをしっかりと作ること、それが、自分にとっても子どもにとっても大事なことであり、エビデンスに基づいた言動によって、子どもたちの信頼へと繋がり、よりよい関係性へと繋がると述べられていた。





２．にかほ市の教育

にかほ市は、風光明媚な場所であり、教育委員会も小高い場所にある。その場所からは、鳥海山も眺められるという非常に素敵な場所だ。にかほ市は、「にかほ地域学」などの、秋田県も教育の肝としている“ふるさと教育”に尽力している。その中の大きな取り組みとして、“生涯学習”がある。地元のよさとは何なのか、「にかほ市は自然がいい」果たしてそれは具体的にはどういうことなのか、それを理解するために、「ワクワク大作戦」や「カムバックサーモン」「太鼓三昧」などの、自分の足で自分自身でやってみて経験するという、“経験知”を得ることができる活動を実施している。昨今、グローバル化や GIGA スクール構想による ICT 機器の普及により、こうした昔ながらの体験的な学習というものは減りつつある。そうした背景も踏まえると、こうした経験知でしか得ることのできない学びというものは非常に大きいと言える。ふるさと秋田を大事にしてもらうためにも、こうした体験的な生涯学習というものは、今後の教育活動において、欠かせないものになってくるといえるだろう。




３．前段階を理解する

「高校は中学校の上に、中学校は小学校の上に、小学校は幼稚園保育園の上に、幼稚園保育園は家庭の上に」という言葉がある。これは最初の部分を切り取ってみると、高校は中学校の学習過程・内容を知らないといけないという意味である。この言葉の様に、ただ自分の学校種のことだけではなく、段階を踏まえているということを理解し、他の校種のこともしっかりと学び理解することが子どもを理解するうえで必要であるということ述べられていた。常に私たちの教育の基盤には、子どもの家庭があって、その一つ一つの家庭を私たちはしっかりと見て理解することで、子どもとうまく接することができるのではないだろうか。

**【安達健登】**

## にかほ市教育委員会教育長講話

小園教育長は、以下のテーマで講話をしてくださった。

### １. 世界は足元から広がっていく

秋田県教育の肝である「ふるさと教育」は、教科書を使わない学びであり、学習には必ず地域の人（他者）が関わってくる。ふるさと教育においては、こうした他者と関わることそのものが学習の大きな価値となる。にかほ市では、子どもたちがサケの稚魚を放流し、成長して川に戻ってくる様子を見取る「カムバックサーモン」をはじめ、にかほ市でしかできない教育が数多く存在する。こうした教育を積み重ねていく、つまり「地域（足元）から子どもを育てる」ことが重要であり、地域の発展のカギは「子ども」にあるといえよう。

そのため、ふるさと教育を行う教師は、子どもの足元である地域を理解することが必要である。地域の特色を学ぶことはもちろん、地域の人々が当たり前だと思っていたものが貴重な地域資源であると気付くことも地域理解の１つである。こうした視点も踏まえると、教師が子どもの暮らす地域を理解し、地域資源を活用し、地域の中で教育を行う意義や価値が改めて見えてくると感じた。






### ２. 見える化から見せる化へ

「見える」は、自然に目に入ってくる状態を表す自動詞であり、意識せずとも何かが視界に入る状況を指す。それに対して「見せる」は、他人に何かを意図的に伝える行為を指す他動詞であり、相手に見てもらうという目的が伴うという違いがある。教育においては、何をしようとするのかという「意思」の「見せる化」が重要である。これは、教師であっても子どもであっても同様である。他者に自分の思いを知ってほしいと思うのであれば、誰かが気付いてくれるを待つのでなく、自分から他者に伝えることを意識することが必要である。教師がこうした姿勢を「見せる」ことで、子どもも自分の考えや思いを表そうとするようになる。こうしてお互いの思いが分かるようになることで、段々と子どもの喜びや笑顔が「見える」ようになるのである。

### ３．生涯学び続けよう！

講話後の質疑応答で、とある院生が「どうしたら教育長のように熱く面白く話ができるか。」と質問をした。この質問に対して、教育長は「新聞の記事や他の人から聞いたことをメモして、いつでも見れるようにしている。こうしてインプットしたものを、自分の経験と絡めながら話すように心掛けている。」と回答した。教育長は続けて、「インプットしたものを、これまでの自分の経験や知識をエビデンス（背景）としてアウトプットすることが重要である。だから、たくさんの経験をして、学び続けることが必要なのだ。」と話した。

私たちは、学習者であり、教育者である。私たちは、教員であり、管理職である。私たちは、児童・生徒であり、自分以外は全て師である。教育長のこの言葉を胸に、生涯学び続ける教師でありたいと思う。

**【佐藤里香】**

## にかほ市教育委員会との懇談について

当日は，菊地良学校教育課長から，にかほ市の学校教育について説明いただいた。

### １　にかほ市の教育資源

にかほ市の地域的特色として，豊かな自然が数多く存在しており，これらの自然の恵みを活用しながら産業が発展していることが挙げられる。ＴＤＫをはじめ，先端科学技術を駆使した世界規模の企業が産業基盤となっており，にかほ市は自然と科学技術のまちであるといえる。にかほ市では，このような地域的特色を踏まえ，市内の各種教育施設のセカンドスクール的利用を推奨しており，地域の豊富な教育資源や人材の活用を積極的に図りながら，にかほ市の特色を生かした教育を推進していると分かった。

### ２　にかほ市の子どもの実態

にかほ市内には，小学校 4 校，中学校 3 校，高等学校 1 校が設置されている。市内の小・中学校では，規則正しい生活習慣や家庭学習の習慣化，学習活動における約束の徹底指導，学力向上に向けた指導方法の工夫改善が進められている。また，豊かな心を育む教育も推進され，児童生徒の思いやりの心や柔らかな感性が育っているとのことだった。一方で，学習面においては，学習意欲の喚起や知識・技能の定着に課題を抱えており，こうした課題を克服するために，児童生徒が「自ら学ぶ意欲」をもち，「学ぶ喜び」や「達成感」を味わうことのできる魅力的な授業づくりを一層推進していると分かった。にかほ市では，この基盤を教師と児童生徒どうしの信頼関係の構築であると捉え，。このような信頼関係の中で積み重ねられる小さな成功体験が学習意欲や学力の向上へと確実につながっていくと考えていた。さらに，タブレット端末等の ICT 機器を効果的に活用し，自らの課題を追究する「個別最適な学び」を深めるとともに，児童生徒の考えを可視化し，相互に意見を交わしながら学びを高め合う「協同的な学び」の充実を図っていくことにより，基礎となる力を活かし，応用発展させる「活かす力」の育成を目指していると分かった。



### ３　にかほ市教育委員会との懇談を通して

菊地学校教育課長のお話を聞き，にかほ市では，地域の教育資源を活用した教育を推進することにより，地域に根差した独自性の高い教育が実践されていると感じた。また，市内の小・中・高等学校間の交流も積極的に実施されており，市単位での取り組みが組織的に実施されている点も特徴であると感じた。

また，にかほ市における学校教育の重点の中では，「にかほ地域学の充実と発信」についての取り組みが印象的だった。院内小学校に訪問した際には，廊下壁面にも「にかほ地域学」についての掲示を見かけた。防災教育，プログラミング学習といったトレンドの教育内容と，郷土の偉人や歴史等に学ぶ学習やにかほジオ学を結び付けている点が参考になった。地域の歴史や地理的特色への理解を深めることで，地域の魅力を再発見するとともに，地域への所属感を高まると感じた。

**【相馬　慈】**

## にかほ市教育委員会懇談

菊地学校教育課長から、にかほ市の学校教育についてお話をしていただいた。

１　にかほ市の地域学習

地域学習において大切なことは、県やそれぞれの市町村によって風土や学校の狙いが違うことを認識することだと示されている。その上で、にかほ市がどんな場所で、どんな生業があり、将来どうなっていくのか、子どもたちはどんなふうに育ってほしいかといった観点で教育をしていく必要があると考えられている。

にかほ市には、鳥海山の美しい山体をはじめとして、他の地域からは見ることができない景色や受け継がれてきた多くの文化や伝統がある。こうした地域性を生かした学習や行事をできる限り取り入れながら、唯一無二の存在である子どもたち一人一人を大切にするために、様々な地域資源を用いていることがわかった。



２　学校教育の重点

にかほ市の学校教育には大きく分けて４つの重点があった。

（１）心豊かで創造的に生き抜く力を育む
（２）基礎学力の定着と学んだことを活かす力の育成を目指す
（３）地域社会に開かれた信頼される学校づくりを推進する
（４）健康でたくましい心と体を育成する

特に、（１）については、にかほ市のふるさと教育を基盤としたキャリア教育の充実を図っていたり、（２）におけるにかほ地域学の充実と発信を推進していたりと、地域との密接な関わりのもと、学校教育を重点化させることを目指していることがわかった。

３　にかほ市教育委員会との懇談から

菊地学校教育課長のお話から、にかほ氏は地域資源を生かした学習や行事を展開し、子どもたちが心豊かに生きていくための取組を充実させているのだということがわかった。

また、にかほ市には教育委員会が所管する多様な学習機会を提供する施設があり、実際にそのうちの「フェライト子ども科学館」と「白瀬南極探検隊記念館」に訪問した。子どもの学びを深めるために、生涯学習の推進や充実が意識して取り組まれているのだなと感じた。

この研修を通じて、「生涯学習」という概念がとても変わったように思う。教師は「教育者」であるが、同時に「学習者」でもあることが重要であり、学び続けていくことが教員にとっては、人生をよりよくするための活力につながっていくのだとわかった。　**【藤原　宙詩】**

# にかほ市教育委員会との懇談

１.学校教育の目標と「活かす力」の定義

　にかほ市教育委員会は、学校教育目標に「夢をもち、心豊かで、元気な子どもの育成」を掲げ、「『活かす力』を育む学校教育の推進」を重点としている。これは、市のまちづくり基本理念に基づくもので、目指す子ども像には、目標に向かう努力、郷土愛、心身の健康が含まれる。教育理念の中核である「活かす力」は、知識・技能（Ⅰ 基礎となる力）の獲得を土台に、それを高め、応用・発展させる能力（Ⅲ 応用・発展させる力）までの一連のプロセスを指す。この力は、基礎的な力と応用的な力の相互作用によって高まると定義され、主体的・対話的で深い学びを通じて育成される資質・能力を明確に表現したものだ。知識の獲得から実践的な活用能力の育成までを一貫して目指す、持続可能な教育のあり方を追求する思いが感じられた。

２.資質・能力の育成に向けた重点施策

　にかほ市は「心豊かで創造的に生き抜く力を育む」と「基礎学力の定着と学んだことを活かす力の育成をめざす」の２点を中心に施策を展開している。前者の重点では、幼保小連携、小中高連携、小中一貫教育の推進が挙げられている。これは、子どもの発達段階に応じた「切れ目のない教育」を提供し、全人的な成長を組織的に支えるための基盤整備である。後者の重点では、タブレット端末等を活用した学習の推進や、理科、数学、英語といった主要教科の充実が図られる。特に、教育専門職や教育指導員による外国語活動・英語教育の充実が明記されており、専門性の高い指導体制の構築を目指す。また、郷土の歴史や文化を学ぶ「にかほ学」の充実は、地域理解を通じた学習意欲の向上と郷土愛の醸成を両立させる、地域資源を活用した取り組みである。小中一貫教育の推進は、特に小規模校が多い地域において、一貫性のある教育課程を保証する上で極めて有効な手段である。また、英語教育における外部専門人材の積極的な活用は、教員の負担を軽減しつつ、指導の質を担保しようとする合理的かつ実効性の高い対応であり、これらの施策は「活かす力」を育成しようとする多角的かつ包括的なアプローチを示している。



３.地域連携の強化と「たくましい心と体」の育成

　にかほ市の教育は、地域社会との連携強化と、子どもの心身の健康を重視する側面に強みがある。「地域社会に開かれた信頼される学校づくりを推進する」施策として、コミュニティ・スクールの推進を含む学校支援活動の充実が掲げられている。これは、学校と地域が一体となって子どもたちを育む「地域総がかり」の体制を整備する試みである。さらに、「健康でたくましい心と体を育成する」重点では、地産地消食育事業の推進や、いじめゼロ・不登校対策が明確に示されている。コミュニティ・スクールの推進は、郷土愛を育む教育目標を実現するための社会構造的な基盤を形成する試みとして評価できる。学校を核とした地域連携の強化は、子どもの学びの機会を増やすだけでなく、教員の孤立を防ぎ、地域全体で教育の質を高める相乗効果を生む。地域が一体となって子どもたちを育てていくという意識が醸成されていることを実感した。

**【丸岡初香】**

## 研修旅行感想

【現職院生】

〇市の学校教育の方針の下、地域の願いや思いに支えられながら、小・中・高と成長していく子どもたちの姿に触れることができ、三校種のつながりを学ぶ貴重な機会となった。恵まれた自然環境、特色ある地域産業、先人の偉業を伝える施設など、豊かなふるさとの教材を生かし、どの学校も地域とともにある学校づくりを進めていた。にかほ市の魅力と強みを生かした教育に触れ、「世界は足元から広がっていく」という言葉に出会い、学校を取り巻く地域環境のよさを教師自身がしっかりと捉え、子どもたちの心が揺さぶられるようなわくわくする体験や、ピンチをチャンスに変えるような探究的な学びの場をつくっていくことの大切さを改めて感じた。子どもたちの元気と笑顔こそが、学校の何よりの宝物。それらを未来へとつなぐ学校づくりをこれからも目指していきたい。



〇今回の視察は、地域と学校が一緒になって子どもを育てる多様な姿を感じる機会になった。仁賀保高校の公営塾や地域による学校存続の支援は、進路形成を地域が後押ししている姿を目の当たりにし、特別支援学校でも卒業後の地域定着やキャリアづくりを考える上で参考になると感じた。また、仁賀保中学校や院内小学校での目標共有の取組は、生徒が自分の未来を考えやすくする手掛かりになっていたと思う。地元の施設や自然を活用した体験的な学びも、地域の魅力を知り、誇りや愛着を育むことにつながっており、地域の中で育つ過程が子どものアイデンティティ形成や将来像の描き方に大きく影響することを実感した。キャリア教育や地域とつながる取組をより一層工夫し、生徒が地域の中で安心して将来を思い描けるような環境づくりを考えたい。

〇にかほ市の教育を小学校から高校までの 12 年間の繋がりを学校経営、授業、地域の文化施設から学ぶことができた。特別支援学校も小学部から高等部までの 12 年間を指導、支援しており、その際に指導の系統性が話題になる。系統性を意識するために繋がりを可視化したり、教員同士が縦割りでカリキュラム・マネジメントの視点で物事を考えたりすることを大事にしていて、今回の学校視察からも同じような実践を見ることができた。

〇一つの市に小学校、中学校、高校と整っており、さらに TDK という企業による産業に支えられている街というイメージをもっていた。しかし、少子化による影響は例外なく、郷土の素晴らしい資源の中でどのように子どもだけでなく「人」を育てていくのかという視点で市全体で取り組んでいると感じた。由利本荘・にかほ地域として校外学習でも何度も訪問をしている地域であるが、教育や時代の流れに合わせて内容も新しくなっているところに、「学び続ける」意識を感じ、職員の方からは誇りをもって働いていることを感じた。大人が楽しく誇りをもって生きる姿を見せていくことも子どもたちにとって何よりの教育と感じた。

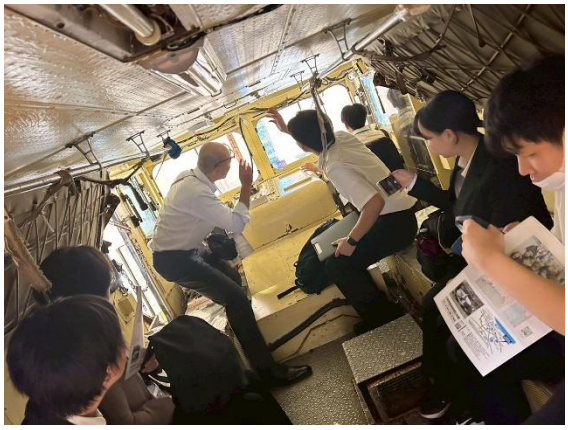
〇地域連携、開かれた教育課程の推進が各学校で取り組まれているが、その一方で、人口減少、地域活動の縮小からくる危機感を大きなチャンスとして、にかほ市がイニシアチブをとり、さらには強烈な教育委員会によるリーダーシップにより、にかほ市の充実した教育が成り立っているのだと感じた。教育は、学校教育、社会教育、生涯教育、スポーツ振興など、多岐に影響を与えるものであることから、地域コミュニティー全体の存続可能性を高めるためのツールになり得るものであること

を認識した。地域の教育資源を一つにする役割を教育が担っているのではと考えた。教育について良いニュースが最近ないが、私達が関わっている教育は、とても力のあるもので、可能性のあるものであるということを、この研修旅行で学ぶことができた。

〇今回の研修では地元の小学校の授業、中学校の授業を参観し、学力の向上や、心の変化といった視点で子どもたちの成長を捉え直すことができた。教育に対する視野が広がり、あらためて教育の果たす役割の大きさを実感したところである。また、他地域出身の先生や学生と意見交換する中で、にかほ市の教育を客観的に見ることができた点も大きな収穫であった。豊かな教育資源と恵まれた教育環境があることに感謝するとともに、市教委の取組にも敬意を表したい。地元の教育に誇りをもち、これまで以上に地元を愛する子どもたちを育てていきたいと思う研修になった。

〇今回の訪問を通して強く感じたのは、学校や教育委員会が「地域」と不可分の存在であるということである。各学校は、学力向上や授業改善といった普遍的な課題に向き合いながらも、同時に地域の文化や自然、伝統行事を教育資源として積極的に活用していた。これは「学校の特色づくり」であると同時に、子どもたちにとって学びが自分事となり、将来のキャリアや生き方とつながる重要な要素だと感じる。そのためには、学校がもつ強みや弱みを客観的にアセスメントする SWOT 分析が非常に有効であると感じた。また、教育長や校長の言葉からは、教育理念を日々の実践にどう落とし込むかという思いがつたわってきた。単に知識や技能を教えるだけでなく、言葉や仕掛けを通して子どもの心に残る教育を行う姿勢に、教育者としての使命感を改めて学んだ。さらに、不登校ゼロの小学校や地域行事と結び付いたキャリア教育など、参考となる取組が多数あった。学校と地域をどうつなげていくかということに関してはっきりとしたビジョンを持っていなかったが、今回の研修を通して、教育は地域とともに未来を育む営みであるという視点を新たに持つことができた。

〇今回訪れた場所は仁賀保高校を除いて全て初めての場所であったが、少子化・過疎化が急激に進んでいる秋田県にも、このような魅力的な場所・人たちが「資源」として在るということに気付かされた。このことはただ「在る」ものにアプローチした結果ではなく、現状に至るように「育てて」きたからではないかと感ずる。また、一泊ではあるがストマスの仲間たちや教授の皆さんと寝食を共にし、改めて繋がりが強まったと思う。「研修とはこういうことなんだ」と気付かせていただいた、柘植先生をはじめとする教授の皆さん、素晴らしい 2 日間をありがとうございました。来年も参加したい（くらい）です。



〇今回の訪問を通じて、教育の本質や学校運営の在り方について多くの示唆を得ることができた。高校における「情報メディア科」の授業では、ICT を活用した主体的・協働的な学びが展開されており、生徒一人一人の達成感を大切にする教師の支援の姿勢が印象的であった。また、地域との強固な連携のもと、生徒の成長実感につながる魅力化事業が展開されており、高校の存続と地域の活性化を両立させる好事例として学ぶ点が多かった。小、中学校においては、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりや、言葉・対話・触れ合いを重視した温かな学校づくり、CS の仕組みを活かした地域連携によって、特色ある教育活動やキャリア教育の充実が図られている点も、今後の

学校運営において参考にしたい重要な要素である。加えて、にかほ市が提唱する「にかほ地域学」による地域密着型の学びは、子どもたちの郷土愛を育み、地域の未来を担う人材の育成につながる可能性を感じた。地域を知り、学び、発信し、貢献するという一連のプロセスが、教育と地域社会の好循環を生み出すことにつながると考える。最後に、教育長の講話からは、教員としての姿勢や在り方について深く考えさせられた。自分なりの確固たる信念やぶれない軸をもちながら、柔軟な発想、逆転の発想で学び続けること、そして子どもと共に学ぶ姿勢の大切さを改めて認識した。これらの学びを今後の教育実践に活かし、よりよい学校づくりに貢献していきたい。

〇私はにかほ市のことについて「全然知らなかった」と反省した。にかほ市だけではなく、秋田県内であっても、その魅力や強みを全く理解していない地域がたくさんあるのだと思う。自分がこれまで赴任してきた学校、その学校がある地域については、少しだけ地域のよさを「教えていただいてきた」と思うが、これまでの私は多くが「受け身な学び」であった。もっと自分から、「学ぼう」という意欲や熱量をもって、様々なことに取り組んでいくべきだと感じた。大学院の後期授業が始まる直前にこのような気付きを得られたことは、私にとって大きく、貴重な研修だった。大学で学ぶことができる、院生の皆さんや先生方と過ごすことができる貴重な環境に身をおけていることに感謝し、後期に取り組みたい。

【学卒院生】

〇にかほ市を訪れたことにより、とても魅力的な地域資源とその中で豊かに学ぶ子どもたちの様子を知ることができた。その中で特に大切と感じたのは地域を知ること、そして地域とつながることであった。特に小学校では　油田の学習やスキー教室などが行われており、にかほ市ならではの魅力を感じることができる。私の生まれ育った地域にはない取り組みであり、とても有意義であると感じた。私は今後教員として働き、様々な地で子どもたちと触れ合うだろう。しかし、一歩自分の育った市から出ると知らないことばかりであった。そのため、まずは地域を知ること、そしてその魅力をたくさん子どもたちに伝えられるような授業を目指していきたい。



〇２日間の研修旅行を通じて、ふるさと教育とカリキュラム・マネジメントの重要性を学ぶことができた。小・中・高の授業参観や学校経営の説明で共通していたのが、ふるさとのよさを活かす教育であった。生まれ育った地域資源を活かした教育は、温かみがあり、将来子供たちが社会に出た時、ふるさとでの貴重な経験が人生をより豊かにすると実感した。また、地域を知るだけではなく、地域に貢献することも重要視していて、学校が地域社会に与える影響、逆に地域社会が学校に与える影響の大きさにも気づかされた。そのためには、カリキュラム・マネジメントが必要であり、日々の授業や特活を結び付け学びに繋げるかは教師に託されている。この学びは今後に活かしていきたい。

〇秋田県の中でも自分が知らなかった教育施設や教育資源がたくさんあることを学んだ研修だったと感じる。公立の小・中・高等学校の学校経営についてや授業の実際の様子を見ることができたのも非常に貴重な経験になった。校種が異なっていてもにかほ市特有の教材や環境を活用したつながりのある教育が行われているように感じ、そこには教育委員会等も含め様々な関係機関が子ども達の

豊かな学びや将来に対する思いを１つにしていることが必要不可欠なのではないかと思った。まだ自分は配属される地区や地域が分からないが、その先々でどのような教育を目指すべきかを良く理解した上で、リソースの活用等も含めて教職に臨みたい。




〇初めての研修旅行は本当にあっという間で、濃密な時間の中で多くの学びを得ることができた。小・中・高すべての校種の授業を観察する機会をいただき、発達段階に応じた指導や授業づくりの工夫を直接見ることができたのは、今後の学びに大きく生かせる貴重な経験だった。また、校長先生方から学校や地域が一体となって子どもを育てているというお話を伺い、教育に対する熱意と地域の温かさを強く感じた。さらに、白瀬南極探検隊記念館やフェライト子ども科学館では、展示や体験を通して自分自身も子ども心に返りながら楽しむことができた。にかほ市にこのような教育施設があることをこれまで知らなかったが、こうした施設が充実していることで、地域の子どもたちが体験から学ぶ機会を豊かに得られているのだと実感し、大きな魅力を感じた。これまでにかほ市をゆっくり訪れたことはなかったが、今回の研修を通して、自然や人、教育の温かさにあふれた素敵な地域であることを知った。特に、子どもたちの素直で生き生きとした姿や、先生方の真剣で愛情のこもった姿勢に触れ、教員としての自分のあり方についても考えさせられる機会となった。

〇今回の研修では、にかほ市の教育や観光資源、人々の温かい心に触れ、にかほ市の地域性や魅力について感じ取ることが出来た。特に学校訪問を通して、児童生徒の深い学びを引き出す教師の発問の工夫や協働学習の充実など、これからの教員生活に向けて参考になる点を多く学んだ。馴染みのない地に行って一番感じたことは、地域と教育は密接に関わっているということである。地域社会そのものが児童生徒の学びとして機能するのであり、学んだ知識や技能を実生活に生かす力を養わせることで、地域の持続可能性にもつながっていくのではないかと考える。つまり、地域に根ざした教育とは、子どもだけでなく、地域の未来を支えるものであり、そのためには、教師が地域について体験的に学び、理解しておく必要がある。地域に生きるリアルな子どもの姿を間近で見ることができ、貴重な経験となった。

〇普段あまり訪れることのないにかほ市だったが、にかほ市内の学校視察や施設訪問を通してにかほ市の魅力に触れることができた。自然の豊かさはもちろん、歴史があり、温かい人の多い土地であることを知った。特に施設訪問で訪れたフェライト科学館では、フェライトと TDK の歴史を学ぶことで秋田の誇る TDK の世界に通用する技術力や、科学の面白さと不思議さに触れることができた。こういった施設が秋田県内にあることを知らなかったので、秋田市のことだけではなく市外のことについても知ろうとしてみようと感じた。自分の住んでいる地域のことを知ろうとすることも大切だが、それ以外の地域についても知り、その地域や地域の持つ特色を楽しもうとすることが最も大切なのではないかと考えた。秋田市だけではなく市外にも目を向け、広い視野で秋田県を見ることで、魅力を更に知っていきたい。

〇にかほ市での研修を通して、地域の自然豊かで貴重な教育資源を最大限に活用しているところが印象的であった。学校だけでは学ぶことができな

いことを、学校の外に出て五感を使って学びを実感できる環境に恵まれており、それらを大切にする意識が感じられた。地域を大切にすることはもちろん、県外での活動にも力を入れており地域の魅力やよさをたくさんの人に伝える活動を通して、児童生徒も自分たちのふるさとをより愛する気持ちが高まっていくのではないかと感じた。今回の研修を通して、自分の地域の豊かな教育資源についても、もう一度探し、大切にしていきたいと思った。

○今回のにかほ研修旅行では、にかほ市の方々の温かさや優しさというのを強く感じた。そして、受け入れていただいたことに感謝の気持ちを強く感じた。各学校や各施設が地域とのつながりを意識されていて、市側も学校や施設とのつながりを大切にしているということが訪問を通して伝わってきた。講義形式や座学として学ぶことは多くあったが、実際の場面から学ぶということは多くないため、より実践に近い形で学ぶことができたこの研修旅行はとても有意義なものになった。今後の実践に活かしていけるようにさらに情報を入れていきたい。

○今回の２日間の研修を通じて、にかほ市の教育の厚さに驚かされた。少子高齢化が加速する秋田県で、子どもたちにとって魅力のある学びができるように、地域の特性を生かした教育活動が展開されており、訪問した仁賀保高校、仁賀保中学校、院内小学校それぞれの児童生徒たちが、生き生きとしており、こうした場所で自分自身も学びたかったなと、子どもたちに嫉妬してしまいました。小園教育長の話の中で、「自分の足で自分自身がやることに意味がある」という話があり、徐々に生涯学習というものの規模が小さくなっていく今こそ、子どもたちに自分自身で気付き学ぶためにも、自分たちの足で経験するということが大切だということを知り、私が教員として現場に立つ際には、大事にしていきたいと思った。また、小園教育長の発想の転換には驚かされた。嫌なことや不安なことを転換してプラスの力へと変えていく、それが現場においては大事であり、そのトリガーを子どもたちに与えるのも教師の役目なのではないかと思った。とても有意義な２日間だった。



○２日間の研修を終えて、にかほ市は、学校だけなく市全体で子どもを育成しようとしていること、地域全体が同じ方向に向かって進んでいることを学んだ。人口は決して多い訳ではないか、地域資源の潤沢さを最大限活用している点が強みだと感じた。ふるさと教育を中心に子供や地域に根差した教育が展開されることによって、「地元には何もない」と県外に移住する人でなく、「地元には魅力があふれている」と誇りがもてる人が増え、結果として地域がさらに豊かになっていくのだろうと考えた。そのため、“世界は足元から広がっていく“を体感すること、つまり、子どもたちが教育を通して地域を知ることがどれほど重要なのかを今回の研修で強く実感した。

○研修旅行を通して、にかほ市の教育には、①市内の学校園どうしの連携の充実、②豊かな地域資源を生かした教育活動、の２点の特色があると考えた。①について、市内の小学校４校、中学校３校、高等学校１校を中心に、統廃合を見据えた連携や校種間どうしの交流などが推進されていた。②について、豊かな自然環境や教育施設などといった豊富な地域資源に恵まれており、「本物に触れる」学びが保障されていると感じた。また、小園教育長の講話からは、教育長のリーダーシップの重

要性を実感した。教育長が情熱をもって教育の方針を示すとともに、学校教育と社会教育の接続を重視し、生涯（学び続けるための）学習を導く教育を推進している点も、にかほ市の教育の特色であると感じた。

〇課題実地研究全体を振り返ってみて、２日間を通じ、とても内容の濃いものだったと感じている。１日目の仁賀保高校に始まり、そこから何もしない時間がほとんどない状態で駆け抜けていったように思った。実際に、小中高等学校に参観したことからも、にかほ市独自の教育体制や子どもたちの現状なども知ることができ、秋田県にいながらも知らなかったことを知ることができたのがとても良い体験になった。この研修で学んだことを今後の講義や実習に生かしていきたいと思う。

〇今回の実地研究を通して、にかほ市全体で地域資源を積極的に活用し、子どもたちの学びを深めるという、一貫した教育の方向性を強く感じた。教育を単に「教える側」からの視点ではなく、学習者が「どのように学ぶべきか（学習の在り方）」という視点から深く考察する必要性を再認識させてくれた。地域と学校が一体となって子どもを育てていくという理念に基づき、今後の自身の教育実践について深く問い直す機会となった。



〇２日間の研修旅行を通して、にかほ市では小・中・高校の連携が強く、清らかな水や鳥海山などの自然資源、そして博物館などの文化的資源を活かした教育に力を注いでいることを知った。たとえどれほど豊かな環境で学んでいても、その地域で生まれ育った子どもたちにとっては、それが当たり前となり、その価値に気付きにくいものである。にかほ市では、子どもたちが地域の魅力を実感できるよう、学校行事などを通してさまざまな工夫がなされていた。今回の研修は、私自身の地元に置き換えて、どのような地域資源をどのように活用すれば、子どもたちに地元のすばらしさを実感してもらえるのかを考える契機となった。一時的に地元を離れたとしても、その魅力を忘れず、「カムバックサーモン」のようにいつか帰ってきてくれるような取り組みを、今後私自身も模索していきたい。

〇今回のにかほ市の研修旅行ではにかほ市の教育について知ることができ、にかほ市自体への理解も深めることができた。全体的な印象として感じたことは白瀬のぶやフェライトを含めてにかほ市には他市・他県・そして世界に誇れる強み（教育資源）がたくさんあるということ、にかほ市の学校はどの学校も地域との関わりが強く、子どもたちが安心して落ち着いた学校生活を送ることができる環境が整っているということである。これまであまりにかほ市を訪れる機会はなかったが、今回の研修旅行を通してにかほ市のよさを理解することができ、また、将来にかほ市の学校に勤務してみたいと感じることができた。

〇にかほ市の教育は、地域と学校が強く結びついている点が特色だと感じた。学校は、地域の魅力化プロジェクトやボランティア活動を通じ、地域と関わりながら学びを進めており、教育委員会は、地域に根ざした教育を展開するための学校再編や支援を進めていた。また、白瀬南極探検隊記念館やフェライト子ども科学館といった地域施設が、学校教育と連動して子どもたちの探究心や科学的な視野を育てていると、体験して感じた。このような取り組みは、まさに「開かれた学校」の象徴だ。学びを校内にとどめず、地域全体に広げていることは、にかほ市の教育のよさであると考えた。

〇にかほ市は、フェライト子ども科学館や勢至公園など、これまでに何度も訪れたことはあるが、

改めてじっくり学習したのは初めてだった。今回改めてにかほ市のことを深く知る機会となり、知らなかったことが多いことに気付かされた。昨年度の男鹿市同様、秋田市以上にふるさと教育に力を入れていて、地域のたくさんのよさを知り、県外・市外に将来出て行く子どもたちも、秋田やにかほのことを好きになっていくのではないかと思う。私自身、秋田のことをよく知っているつもりではあったが、まだ知らない偉人の存在や教育資源について知ることができた。２日間では巡りきれないほどの場所がまだ残されている。にかほ市に限らず、秋田県の魅力を存分に知り、生徒に伝えていけるような教師になれるよう努力していきたい。



〇にかほ市での研修旅行では、多くの学びを得ることができた。自身の教師としての自覚と責任を再認識し、来年度の教職生活につなげたいと思った。特に、にかほ市教育長さんとの協議は非常に有意義なものであった。自身の強みと弱みを知る良い機会となり、今後の生活で一層自分らしさを追求するきっかけになった。ただし、自身の弱みと向き合うことを忘れないようにしたい。私はスケジュール管理が苦手で、試験や提出物等の締め切りまでの計画を立ててもなかなかうまく行かないことが多くある。このままでは、教師として生徒の将来を助けられるような存在にはなれないので、少しずつ計画を見直し、一人前の教師となれるよう残りの学生生活を充実させたい。

〇今回の一連の学校訪問や講話、施設見学を通して、教育と地域社会が密接に結びついていることを強く実感した。各校では、授業の導入の工夫や落ち着いた学習環境づくり、生徒の切り替えの良さなど、教師の指導技術や子どもたちの学ぶ姿から多くを学ぶことができた。また、校長先生や教育長から伺った学校経営や教育観に関するお話からは、地域の特色や子どもの実態を踏まえて教育を展開する重要性を理解した。さらに、科学館や記念館での体験を通じて、科学の楽しさや歴史的探究心が子どもたちの学びを豊かにすることを実感した。今後は、こうした学びを自分の教育実践に活かし、子ども一人ひとりの成長を支える視点を大切にするとともに、地域と連携しながら学びを広げる教育者を目指していきたい。

〇地域素材を活用し、地域の特性を踏まえた教育活動が行われていることがよく伝わってきた。その背景には、充実した環境や設備と、熱心な指導者、保護者や地域の方々の存在が大きいことを感じた。その地域で生まれたからこそできる教育や、この学校の教育をよりよくしていこう、地域全体で子どもを育てようと姿勢を大切にしたいと感じ、大変勉強になった２日間であった。

〇今回の課題実地研究から、一番印象的だったのが、「地域連携」であった。フェライト子ども科学館や、白瀬南極記念館のような教育に活かすことのできる非常に豊富な地域資源、院内小学校や仁賀保高校、仁賀保中学校で感じた、地域連携に関する意識の高さや、児童生徒一人一人に寄り添った教育の在り方から見える人の温かみが、にかほ市教育委員会の掲げる「知・徳・体の調和のとれた子どもの育成」に繋がっているのだと感じた。この２日間で、にかほ市は、歴史、文化、自然、人、企業など多くの面で、本当に豊富な教育資源を有していると感じた。この学びを今後に活かすために、自分がこのような市で教員をするとしたら、この資源をどう活かし、どのように子どもを育成していくか考えていかねばならない。